

令和4年度 岐阜県家庭教育支援推進事業（家庭教育支援員）の活動報告書

◆市町村名

関市

◆配属部署

協働推進部生涯学習課

◆家庭教育支援員の役割

- 家庭教育を以下の3点から支援する。
- ①家庭の育児者に伴走する。（育児に関わる全ての家庭に対し、就園前から中学校までの、切れ目のない、伴走型支援を行う。）
 - ②家庭と支援者をつなげる。（育児に関わる全ての家庭に支援者の情報を届け、支援者と家庭をつなげる。）
 - ③支援者同士のネットワークをつなげる。（教育・医療・福祉が連携して支援を行えるよう、支援者間での情報共有や活動連携を調整する。）

◆主な活動

■令和4年度 家庭教育支援者養成講座

- ・第1回 5/28 地域が求めている家庭教育支援とは？
～郡上市・中津川市の取組に学ぶ～
講師：郡上市教委社会教育課 公民館専任主事 服部敦子氏
中津川市教委生涯学習課 社会教育指導員 安藤広子氏
- ・第2回 6/25 関市の小中学校が求めている家庭教育支援とは？
講師：関市教育委員会まなびセンター 副所長 寺澤徹夫氏
- ・第3回 7/23 関市の保育園が求めている家庭教育支援とは？
～「森のほいくえん」の取組に学ぶ～
講師：関市立富野保育園 園長 乾 千穂氏
- ・第4回 8/27 関市の外国人家庭が求めている家庭教育支援とは？
講師：関市教育委員会学校教育課 課長補佐 酒井健志氏
関市外国籍児童生徒等教育相談員 森 佳世氏
- ・第5回 9/24 関市が積み重ねてきた家庭教育支援とは？
～「ははこぐさ」の取組に学ぶ～
講師：地域子育て支援センター「ははこぐさ」所長 日置寛子氏
- ・第6回 10/15 関市が積み重ねてきた家庭教育支援とは？
～関市児童発達支援センターの取組に学ぶ～
講師：中部学院大学社会福祉学科 非常勤講師 松波和子氏
- ・第7回 11/26 関市が積み重ねてきた家庭教育支援とは？
～子ども食堂「いちよう庵」の取組に学ぶ～
講師：「寺子屋いちよう庵」主宰 圓通寺住職 岡田英賢氏
- ・第8回 12/10 これからの家庭教育支援に求められていること
～誰もが自分らしく生きるために～
講師：にじいろ安場、認定NPO法人Re-bit 永田 怜氏
- ・第9回 1/28 これからの家庭教育支援に求められていること
～喜びを子どもたちと共に、読書を通して幸せを分かち合う～
講師：学習院大学文学部 教授 秋田喜代美氏
- ・第10回 2/18 これからの家庭教育支援に求められていること
～子どものネット依存の現状と対策～
講師：中濃厚生病院 副院長 内田 靖氏

■乳幼児期家庭教育学級の運営支援

- ・家庭教育支援コーディネーター5名が、関地域乳幼児期家庭教育学級（いちご学級）の企画・運営を担うと共に、学級開催時には参加者に寄り添い、話を聞いたり声をかけたりして支援を行った。

■市内小中学校保護者への家庭教育支援

- ・家庭教育支援コーディネーター3名が市内の小中学校1校に入り、参観日に合わせて「子育て相談会」を実施した。

■旧町村地域の家庭教育学級への支援

- ・極端な少子化の進行によってこれまでのような家庭教育学級の実施が困難になっている地域に対し、地域の実情について担当者とは協議し、適切な講師を紹介するなどして、今後も持続可能な家庭教育学級の在り方について、方向づけを行った。

◆成果

- 支援者養成講座では、地域の現場（小中学校・幼保・地域子育て支援センター・児童発達支援センター・子ども食堂等）で活躍している方や、地域の課題（外国人家庭への対応、ネット依存への対応、LGBTQへの理解等）に対応している方の話を聞き、家庭教育の支援者に求められていることを、具体的に学ぶことができた。その中で明らかになったのは、家庭教育に携わる多くの方にとって、新しい知識を注入されることよりも、やらなければならないのにうまくいかない現状を伴走者的に支えてもらうことの方が、ニーズとして強い、ということである。コロナ禍の下で、保護者同士が交流する機会も極端に減少し、自分が行っている子育てについて誰にも認めてもらうことができず、多くの保護者が子育てに対して強く不安を感じていることも明らかになった。こうした状況に対する一つの対策として、発達支援センターが実施している「親子療育」のように、「保護者の子どもへの対応を支援者が観察し、保護者にははっきり見えないが確かにそこにある、小さな反応やかすかな成長を認め伝えることで、保護者を励ましていく」ような活動が有効なのではないか、という仮説を得ることができた。
- 先進地（中津川市、郡上市）の担当者の話を聞き、それぞれの地域の実践から、家庭教育支援の可能性について、具体的に学ぶことができた。
- 家庭教育支援コーディネーターが関地域乳幼児期家庭教育学級（いちご学級）の企画・準備から当日の運営までを主体的に行い、受講生に寄り添った活動とすることができた。
- 家庭教育支援コーディネーターが市内の小中学校で行った「子育て相談会」では、コロナ禍特有の保護者の「苦しさ」が明らかになった。多くの保護者は、人と人との交流が減った分、ネットからの子育て情報に頼ることも多いが、ネットの情報どおりに子育てはうまくいかず、そのイライラを、自分にぶつけるか、子どもにぶつけるかという状況にさえ陥っている。そんな悪循環を断つためにこそ、がんばっている真面目な保護者の声を聴く「場」が必要とされており、子育ての現実をそのまま認め、励ますことが求められている、ということが明らかになった。こうした事実をもとに、支援コーディネーターを小中学校でいかに活用していくかという課題について、持続可能で効果的な実施の方向性を、少しではあるが見出すことができた。
- 旧町村地域が極端な少子化の進行によって、これまでのような家庭教育学級の実施が困難になっている状況を把握することができた。そのうえで、地域の実情について各地域の担当者と協議し、適切な講師を紹介するなどして、今後も持続可能な家庭教育学級の在り方について、少しずつではあるが、方向づけを行うことができた。

◆問い合わせ先

関市協働推進部生涯学習課	0575-23-7776
--------------	--------------